

# 秋田県のハタハタ漁獲量は、なぜ回復できたのか

秋田県立大学生物資源学部 杉山 秀樹

**Key words** ハタハタ / 漁獲量 / 禁漁 / 資源管理 / 解禁

秋田県民にとってハタハタ（鱒）は、それが無ければ年越しできないもので、「しょつる鍋」、「はたはたずし」など食文化と深く結びつき、字のとおり神の魚として単なる魚類資源という以上の特別な意味をもっています（写真1）。また、ハタハタの慰霊碑や大漁碑などからわかるように、漁業者にとっても昔からの最重要魚種でした（写真2）。ハタハタ豊漁期の1963～1975年は漁獲量が13年間連続して1万トン以上もあり、県海面総漁獲量の50%前後を占めていました。しかしその後急減し、1983年以降は200トン前後が続き、1991年には70トンと過去最低を記録しました。

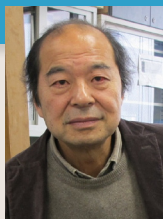
このような状況を受け、秋田県の漁業者は自主



写真1 箱詰めされたハタハタ  
(流通している4kgの箱)



写真2 秋田県沿岸にあるハタハタの供養塔や大漁塚



すぎやま ひでき  
杉山 秀樹

Author 著者

秋田県立大学生物資源学部 客員教授

1974年 東京水産大学水産学部増殖学科卒。1977年 秋田県水産課。2008年 秋田県水産振興センター所長。博士（海洋科学）・技術士（水産増殖）。2010年 秋田県立大学生物資源科学部客員教授。2013年 NPO 法人秋田水生生物保全協会理事長。専門：魚類生態・分類。研究（業務）：希少魚類の保護、「地魚・旬の魚」に関する調査・食文化。著作（書籍）：「田沢湖 まぼろしの魚 クニマス百科」秋田魁新報社（2000年）、「鳥海山の水が育むハタハタとイワガキ」、鳥海山の水と暮らし、p.126-142、東北出版企画（2010年）、「あきたの地魚・旬の魚」NPO 法人秋田地域資源ネットワーク（2011年）、「クニマス・ハタハタ 秋田の魚100」東北出版企画（2013年）など。  
[http://www.geocities.jp/ataqc\\_0502/](http://www.geocities.jp/ataqc_0502/)

的に1992年10月1日から1995年9月末まで3年間の全面禁漁を行うとともに、解禁後も県独自の漁獲可能量制の導入など厳しい管理を行い、最近では1,500トン程度に回復しました(図1)。秋田県のアタアタ漁獲量は、なぜ回復できたのでしょうか。

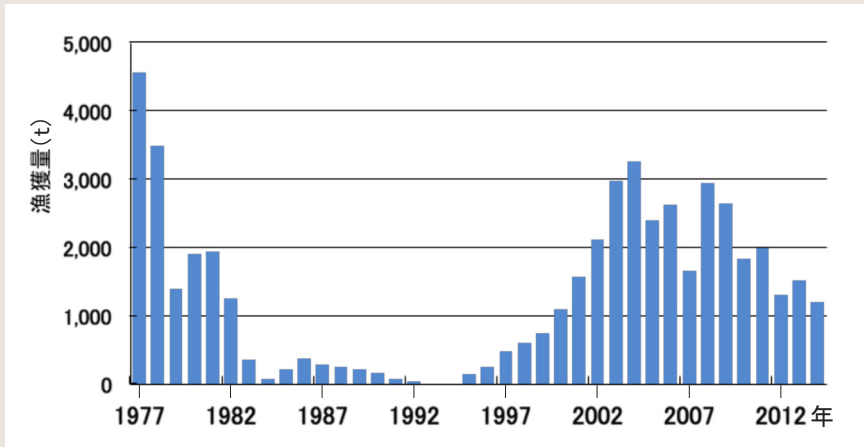


図1 ハタハタ漁獲量の推移  
(禁漁：1992年10月～1995年9月)

## 1. 禁 漁

秋田県のアタアタ漁獲量については約120年間の記録があり、最大は1968年の20,222トンで、基本的には大きな変動を示しているようにみえます(図2)。とくに1975年以降の急減は大きな環境変動によるレジームシフトと考えられていますが、1980年代以降は漁獲量が減少すると単価が増加することから高い漁獲圧が続き、負のスパイラルに陥ってしまった結果の「とり過ぎ」によると推察されます(図3)。

このような中で、1991年には過去最低の漁獲量70トンを記録したのです。秋田県漁連では翌1992年1月に開催された理事会で「大変なことだ。全面禁漁を含め、可能な限りの対策を実施する」と合意がなされました。これを受け、県や県漁連では漁業者に対する現地説明会、意向を把握するためのアンケート調査、漁業種別代表者会議、漁連理事会、全県組合長会議、禁漁した場合のシミュレー

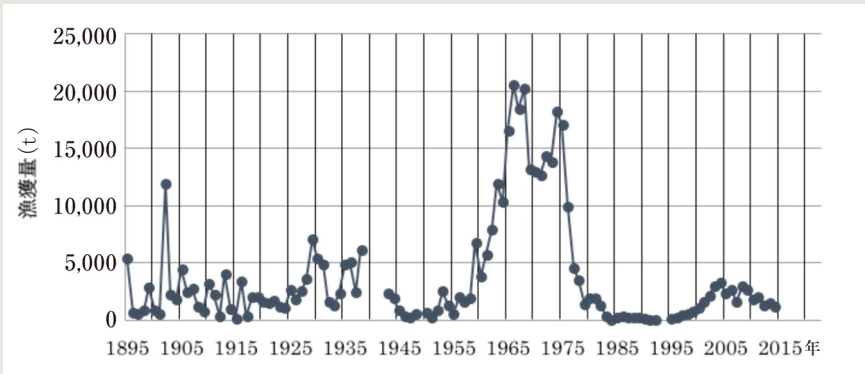


図2 秋田県ハタハタ漁獲量の長期変動

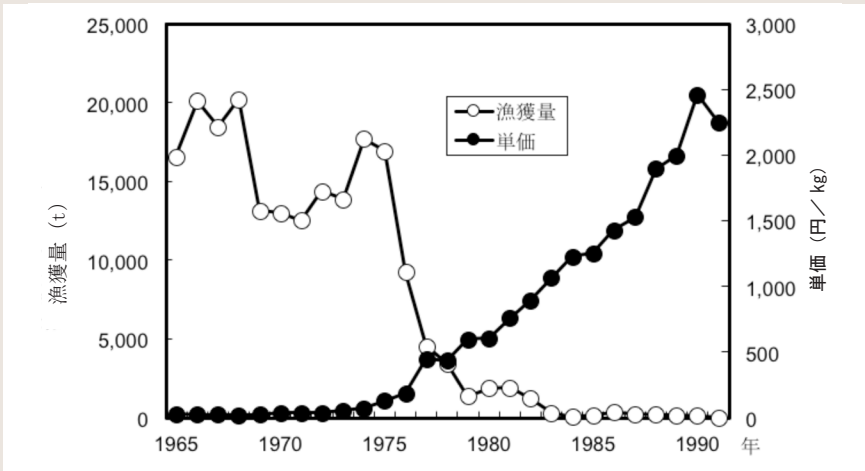


図3 禁漁前の漁獲量と単価の関係

ションなどを行い、連日のように話し合いました。その際、行政が強い意志をもつとともに、漁業者と漁協や研究機関などが参画した体制で行ったことが大きな意味をもったと思います。

紆余曲折を経て、1992年8月29日に全県組合長会議において3年間の全面禁漁が決定され、10月1日付けで厳しい罰則規定を含む「はたはた資源管理協定」



が締結されました。全面禁漁の検討から決定まで半年程度の短期間で行われたのです。

なお、秋田県の漁業者は自県は禁漁するにも係わらず、同一の系群を漁獲している青森県、山形県および新潟県は何もしないことに対して大きな不満がありました。しかし、産卵場をもつのは主として秋田県の沿岸であることや水産庁による隣県への働きかけなどがあったことから、秋田県だけの全面禁漁を実施することになりました。結局、青森県、秋田県、山形県、新潟県の関係4県による「北部日本海海域ハタハタ資源管理協定」の締結は1999年のことでした。

## 2. 資源管理に適合する魚

ハタハタに関する調査・研究は、県の水産振興センターで1980年代から行われていました。その中で多くのことが明らかにされ、それが禁漁の背景になったのです。

ハタハタは普段は水深250m前後の深海で摂餌・回遊していますが、11月下旬から12月上旬になると成熟し、沿岸の水深2m前後のホンダワラ類藻場に卵塊を産みつけます(写真3)。接岸する期間は2週間程度ときわめて短期間で、産卵後は深海へと戻ります。



写真3 ホンダワラ類に付着されたハタハタの天然卵塊

卵数は1,200粒程度と少なく(図4)、卵期は約2カ月で、ふ化サイズは12mm程度と大型です。その後稚魚は4月頃まで沿岸で小型の動物プランクトンを取り、海水温が上昇するに従い深海へと移動し、大型の動物プランクトンを大量に摂餌します。漁獲の主群は1~2歳(12月に産卵すると翌2月にふ化するので、接岸する1歳は1年10カ月程度になる)で、標識放流の結果から、回遊は日本海北部の比較的広い範囲ですが、産卵場は毎年ほぼ同じ場所に形成されることがわかりました。このようにハタハ